

心を磨く

6月の朝会でも「心」の話をした。「心を磨く」という言葉もそのとき耳にしたはず。私自身、年を重ね「心」の大切さを感じるようになった。

心の象（かたち）は「目」に現れる。今の君たちの目、真剣な眼差しに未来への希望を感じる。先日の「西輝が丘祭」事前指導の時の君たちの「目」は忘れられない。特に3年生は自覚と責任を背負った目をしていて、2年生、1年生は3年生の思いを引き継いでいてくれるはずと確信できた瞬間だった。

さて、部活動の新人大会が終わった。昨日は郡市駅伝大会が行われた。今回の大会の結果には、満足なものばかりではなかったはずである。

私の監督時代の話をする。

卓球部顧問としてのスタートは、新任の宇都宮市立陽東中学校。

全校生徒1,700名、40学級というマンモス校であった。3年目で男子卓球部が県大会優勝を果たしたが、優勝チームを残したまま宇都宮市立横川中に異動。ここでは、10年間お世話になった。

宇都宮地区の最弱チームが県大会出場を果たすまで2年、県大会で3位表彰を受けるまでにさらに1年。そして、決勝に駒を進めるまでにさらに1年がかかった。決勝では見事に敗退。勝つことの難しさを知った。関東大会、全国大会出場まで、異動してから7年かかった。

その後、芳賀地区にもどり真岡東中学校に赴任。2年目で県大会3位入賞。もっと卓球の指導をやりたくて「市貝クラブ」を立ち上げた。真岡東中の子たちを見ながら市貝中の子たちを見ていた。自分の息子たちが卓球をやっていたからしかたなかった。真岡東中時代には、県大会優勝や関東大会、全国大会出場を何度か経験させてもらった。

監督をやっていると、試合の中で「勝負を分ける1本」があることに気づくようになる。いわゆる「手抜き」は命取りになることを身をもって学んだ。だから、いい加減なプレーは許せなかった。

そして、最後は「神頼み」。

卓球部の子どもたちには、いつも「ゴミを拾え」、「返事は明るく元気に」「履き物をそろえろ」、「先生が荷物を持っていたら率先して『私が持ちます』と行動で示せ」、「神様は見ている」「神様は自分の心の中にいる」「『自分は、あのときゴミを拾った、だから神様は私を見捨てない』、と思え」「よい行いを積み重ねろ」。「そこまでしてやっと、勝利が自分の方に顔を向けてくれるということを忘れるな」、と言い続けた。

「心を磨く」ことは、とりもなおさず自分を高めること。そして、高められた自分には神様だけでなく、いろいろな人が味方してくれる、応援してくれるものであることを忘れないでほしい。

「ゴミを拾え」。

それが自分の心を磨き、明日の自分を作るのである。君たちのこれからの実践に期待する。